

京都 駅 北

京都の玄関口「京都駅」北側周辺の見どころ

京都駅の周辺や北側は平安時代後期の八条院御所の跡地ですが、中世には商人や職人の活躍の場となり、大いににぎわいを見せた地域です。これらの地域では今まで数多くの発掘が行われ、時代的にも幅広い時代の遺構や遺物が検出されています。これらの地域は東西両本願寺の門前町として栄え、激動の幕末には新選組等の様々な活動の跡を残しています。このガイドマップでは東本願寺、西本願寺の門前町を中心に、格式ある花街の島原までの地域の見どころを、この地の埋蔵文化財を裏面でご紹介するとともに、正面通を中心とした歩き方を示してご案内します。



京都駅ビルより北に烏丸通を望む



ほんくくじいんどういん
本願寺伝道院
東大教授、伊東忠太の設計で1912年に建築されました。木造の伝統を進化させる「建築進化論」をベースに、古典様式を継承しつつ塔屋の形態はサラセン様式が採用されています。(京都市指定有形文化財)



しほんがんじ
西本願寺
書院(国宝)



唐門(国宝)



(西)本願寺のイチョウ：通称「逆さ銀杏」(京都市指定天然記念物)

しょうめんどおり「正面通」のおはなし

豊臣秀吉は死後、自分を神格化させるため、阿弥陀ヶ峰に西向きに豊国廟をつくり、そこから真西に向かって阿弥陀ヶ峰の麓に豊国神社、方広寺大仏殿、さらに真西の本願寺に土地を与えて阿弥陀堂を建てさせ、一直線上に配置しました。徳川家康はこのような秀吉の神格化を防ぐために、豊国廟・豊国神社を壊滅させ、参道を堂々として新日吉神宮を建て、さらに方広寺は妙法院に与えました。そして方広寺と本願寺の間には本願寺を分裂させて東本願寺を創建し、東向きに阿弥陀堂を建てさせ、さらにその東に東本願寺の涉成園を作らせることによって、豊国廟から本願寺へ続く直線をことごとく分断したといわれます。しかし江戸時代中頃になって、方広寺から西本願寺へ向かうこの道が「正面通」と称されるようになったのですから、京の庶民の秀吉に対する人気の高さがうかがわれるというものです。



「正面通」模式図



正面通より西本願寺を望む

かがい しまばら 花街「島原」

豊臣秀吉が二条柳馬場に柳町の花街を公評したのが始まりとされます。その後、六条三筋町に移され、さらに1641年に官命により当地に移されました。その移転騒動が九州で起きた島原の乱を思わせたところから、一般に「島原」と呼ばれました(正式には「西新屋敷」といいます)。また、幕末には新選組等がよく利用し、維新騒動の地の一つとなりました。



しまばらおもん
島原大門(京都市登録有形文化財)
島原の東辺に位置する大門。門前には「出口の柳」が植えられ、「さらば垣」が巡らされています。



すみや
角屋(重要文化財)
かつて島原の揚屋だった角屋は、文化サロンとしての役割も果たしていました。幕末には勤皇・佐幕派双方の会合場所となり、維新の旧跡といえます。現在は「角屋もてなしの文化美術館」として、一般に公開されています。

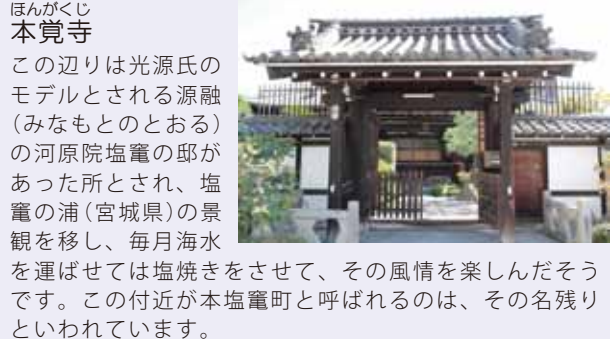


わちがいや
輪違屋(京都市指定有形文化財)
多くの太夫や芸妓を抱えていた由緒ある置屋で、元禄年間(1688~1704)の創業と伝えられています。島原唯一の置屋として、現在も営業しています。

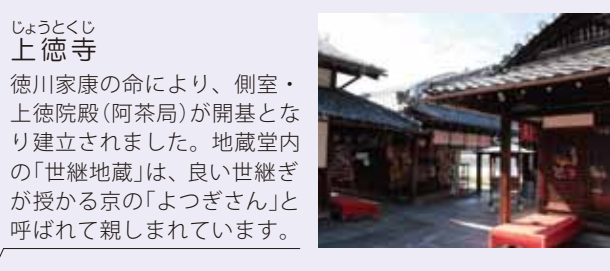
さめがいのあと
左女牛井之跡
左女牛井(佐女牛井、麗ヶ井)は京の三名水の一つ。源頼義(988~1075)がこの地に築いた六条堀川邸内の井戸であったといわれます。茶人の村田珠光(1423~1502)や千利休(1522~1591)らも愛用しましたが、堀川通の拡幅により消滅しました。この辺りの区画を佐女牛井町というのは、この井戸にちなむものです。



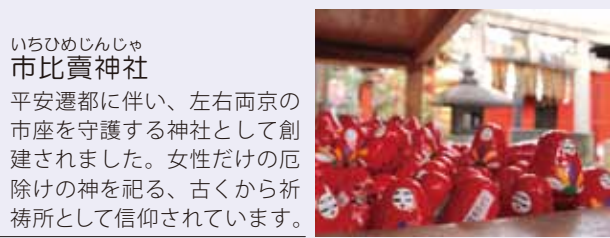
あやこてんまぐう
文字天満宮
祭神は菅原道真で、乳母である多治比文字(たじひのあやこ)が道真の死後、託宣を受け祀ったのが起こりといわれています。



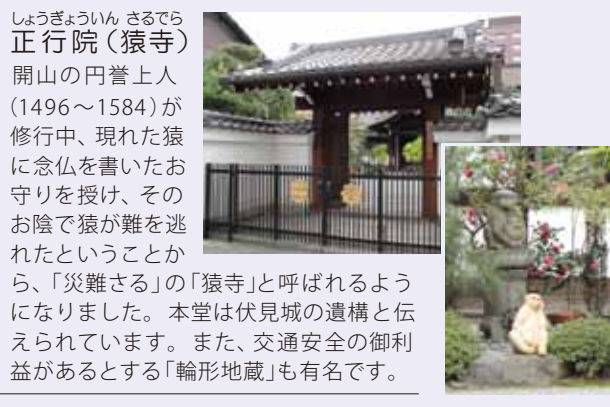
ほんくくじ
本願寺
この辺りは光源氏のモデルとされる源融(みなもとのおとる)の河原院塩麩の邸があった所とされ、塩麩の浦(宮城県)の景観を移し、毎月海水を運ばせては塩焼きをさせて、その風情を楽しんだそうです。この付近が本塩麩町と呼ばれるのは、その名残りといわれています。



じょうとくじ
上徳寺
徳川家康の命により、側室・上徳院殿(阿茶局)が開基となり建立されました。地藏堂内の「世継地藏」は、良い世継ぎが授かる京の「よつきさん」と呼ばれて親しまれています。



いちひめじんじや
市比賣神社
平安遷都に伴い、左右両京の市座を守護する神社として創建されました。女性だけの厄除けの神を祀る、古くから祈禱所として信仰されています。



しょうきやういん
正行院(猿寺)
開山の円普上人(1496~1584)が修行中、現れた猿に念仏を書いたお守りを授け、そのお陰で猿が難を逃れたことから、「猿寺」と呼ばれるようになりました。本堂は伏見城の遺構と伝えられています。また、交通安全の御利益があるとされる「輪形地藏」も有名です。



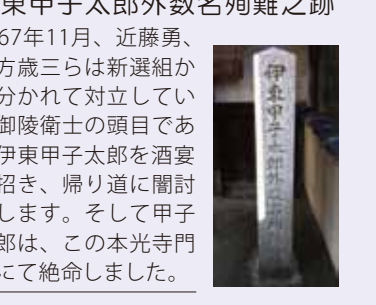
ひがしほんがんじ
東本願寺
御影堂



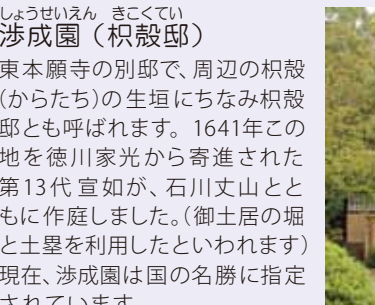
なまこ壁と外堀



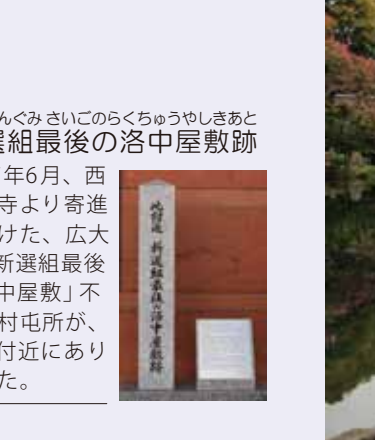
あわしまどう
粟嶋堂(宗徳寺)
婦人病平癒や安産子授など、昔から「あわしまさん」と呼ばれ、女性の信仰のあついで、人形供養でも有名です。



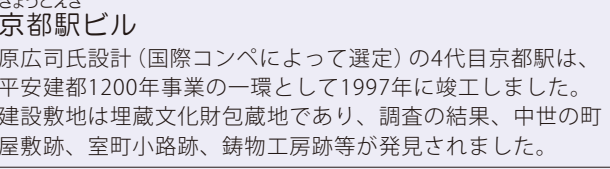
いとうかしらうほかすめい
伊東甲子太郎外数名殉難の跡
1867年11月、近藤勇、土方歳三らは新選組から分かれて対立していた御陵衛士の頭目である伊東甲子太郎を酒宴に招き、帰り道に闇討にします。そして甲子太郎は、この本光寺門前に絶命しました。



しょうきやういん
涉成園(枳殻邸)
東本願寺の別邸で、周辺の枳殻(からたち)の生垣にちなみ枳殻邸とも呼ばれます。1641年この地を徳川家光から寄進された第13代宣如が、石川丈山とともに作庭しました。(御土居の堀と土塁を利用したといわれます)現在、涉成園は国の名勝に指定されています。



しんせんぐみくさいこのらちゅうやしきあと
新選組最後の洛中屋敷跡
1867年6月、西本願寺より寄進を受けた、広大な「新選組最後の洛中屋敷」不動堂村屯所が、この付近にありました。



きやうとえき
京都駅ビル
原広司氏設計(国際コンペによって選定)の4代目京都駅は、平安建都1200年事業の一環として1997年に竣工しました。建設敷地は埋蔵文化財包蔵地であり、調査の結果、中世の町屋敷跡、室町小路跡、錆物工房跡等が発見されました。



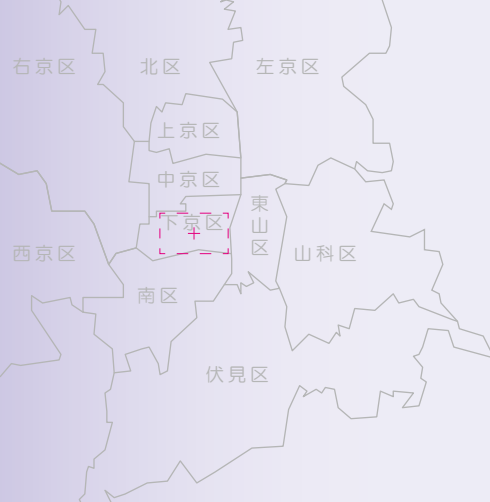
左：傍花閣 右：高石垣



印池より回廊(かいどうろう：左奥)と侵雪橋(右端)を望む

13

京都駅北



～文化財と遺跡を歩く～ 京都歴史散策マップ



発行 京都市・京都市埋蔵文化財研究所

京都駅周辺の発掘調査

京都駅周辺は現京都駅ビル建設とそれに伴う再開発により、発掘調査が多数実施されています。発掘調査からは、平安時代の終わり頃になってこの周辺が整備されてくる様子が知れ、その後鎌倉時代から室町時代にかけては鑄造に関する一大拠点となり、多くの人々が居住したと推測されます。その後は衰退し、耕作地へと変貌し幕末にいたるようです。駅の北部、六条坊門小路には天皇家や貴族の邸宅等があった場所としても知られ、源氏物語のモデルとなった河原院もこの地にありました。

1 河原院

『源氏物語』に登場する光源氏の六条院のモデルになったのが、この河原院です。左大臣源融の邸宅で、平安京六条四坊十一～十四町の四町規模を有していたと考えられています。河原院はその景勝によって知られており、融が庭園内に塩釜をつくり、海水を運んで塩焼きを行ったことは有名です。発掘調査は、十一町内で行われ平安時代前期の六条坊門小路の路面・南側溝と同時に多くの瓦が出土しており、源融の頃と思われる瓦葺きの建物があったことが想定されます。また、平安時代中期後半の池もみつかつており、そこからは松や桃の種子がみつかっています。



2 六条院跡(万寿禅寺)

平安時代後期の11世紀後半、この地に白河天皇の御所が営まれます。これが六条内裏で、その後、白河上皇となり、六条院の大改修を行い、これに伴って敷地の拡張も行われ平安京左京六条四坊三・四町の二町を有したようです。その後、上皇の皇女、都賀門院 媯子内親王がここで亡くなったことで、ここを寺院に代えて内親王の追善にあてました。これが六条御堂と呼ばれた万寿禅寺です。この御堂は度々罹災しますが、その都度再建され、鎌倉時代末期には六条四坊二町も加え、三町を有する大寺院となります。その後も罹災と再建を繰り返し、天正19(1591)年豊臣秀吉により現在の東福寺の北側に移転させられ、今日に至っています。発掘調査は三町内で行われ、鎌倉時代の地業跡や室町時代の池跡を発見しています。いずれも、万寿禅寺に関わるものと考えられます。また、池跡からは焼けた瓦が大量にみつかつており、15世紀の火災後に池内に埋められたものと思われる。



3 左京六条三坊五町跡

平安京左京六条三坊五町跡は平安時代後期の公卿、右大臣源頭房の邸宅「六条殿」があったとされています。また、江戸時代前半には「六条三筋町」と呼ばれたところで、洛中洛外図にも描かれています。発掘調査では弥生時代から幕末までの土地変遷がわかりました。この地の平安時代の開発は11世紀中頃からとなるようです。平安時代の遺構面では、楊梅小路の路面を発見しています。路面上に土器を廃棄した穴や南側溝からは牛・馬の骨が多量にみつかっています。また、中世の面では多数の大甕の掘付穴を発見しました。酒屋・麴室があったと史料にみえますが、それに該当するものだと考えられます。江戸時代の面では、町家の様相がわかるものとなり、ごみ捨て穴等から鑄造に関わるものがみつかっています。



4 猪熊殿/本園寺

平安京左京六条二坊五町跡は、平安時代末期から鎌倉時代の公卿、摂政・関白藤原(近衛)基通の邸宅「六条堀川殿(猪熊殿)」であったとされます。この町の発掘調査では、平安時代前期から後期にかけての建物7棟、井戸が発見されています。本園寺は室町時代の初めに鎌倉から京都に移ってきています。その寺域は南北が七条大路から六条坊門小路、東西が大宮大路から堀川小路の十二町を有する広大なものでした。六条二坊五町や七条二坊八町の発掘調査では、室町時代の本園寺の寺内町に関する堀状の遺構等も発見されています。



5 西本願寺

本願寺は各地に寺地を移転した後、天正19(1591)年に七条堀川の地を豊田秀吉より寄進され、造営が始まり、慶長元(1596)年の慶長伏見地震と元和3(1617)年の焼亡で、阿弥陀堂・御影堂とも倒壊・焼失しますが、その都度再建され、寛永10(1633)年には、ほぼ今日に近い姿になっています。この地は、平安時代には東市に、中世には本園寺の寺域南側にあたります。現本願寺の敷地の大半は国の史跡とともに世界遺産にも登録されています。また、その中の大書院庭園は特別名勝に、滴翠園は名勝にも指定されています。発掘調査では寺域北東部で、池跡を発見しています。これは、桃山時代末～江戸時代初期に宗主教如が隠居した屋敷に伴うものと考えられます。また、阿弥陀堂と御影堂の間での調査では、新旧2時期の池跡が発見され、出土した遺物から、旧池は桃山時代末～江戸時代前期、新池が江戸時代前期のものと思われる。旧池は元和3年の焼亡前の、新池は焼亡後のものと思われ、現御影堂が建てられた寛永10年までに埋められたものと思われる。その他、滴翠園内でも整備に伴い発掘調査が多数行われ、滴翠園の造営や変遷を明らかにしています。



6 左京七条三坊三町跡

東本願寺の西に位置します。発掘調査では、平安時代末期～鎌倉時代にかけては建物や井戸等が、鎌倉時代後期～室町時代前期にかけては堀状の二つの高まりと、その間に埋壊や土器溜等が発見されています。中世後半には生産工房が出現することから、職人の町屋に変わっていったと思われる。



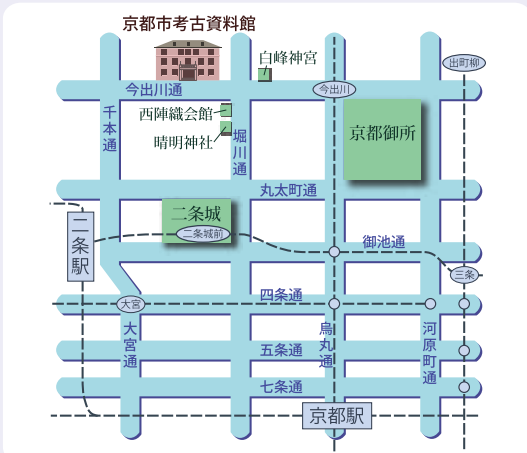
京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1000点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/

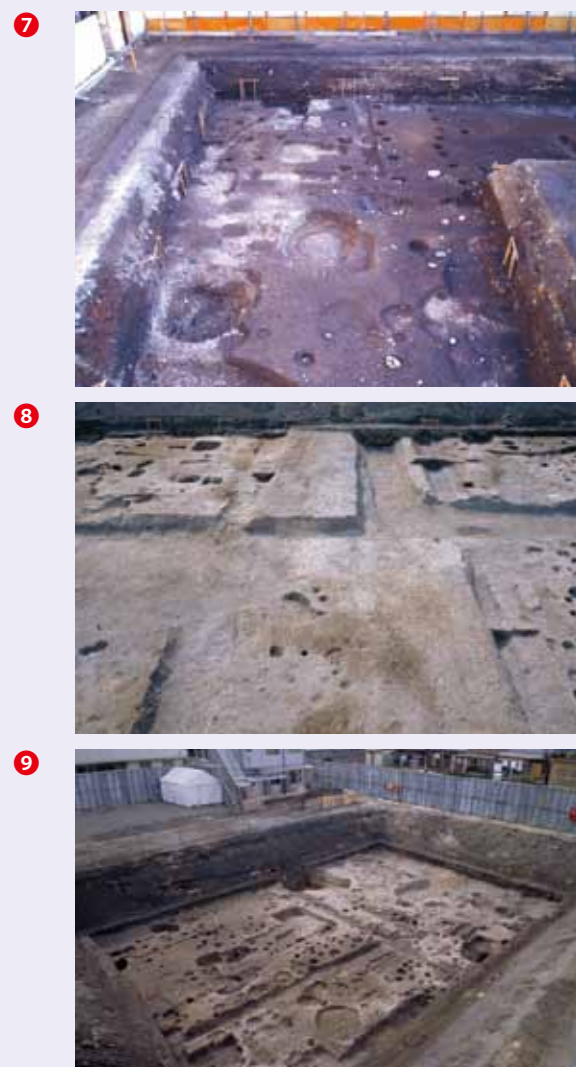
入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)
開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)

JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
バス201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



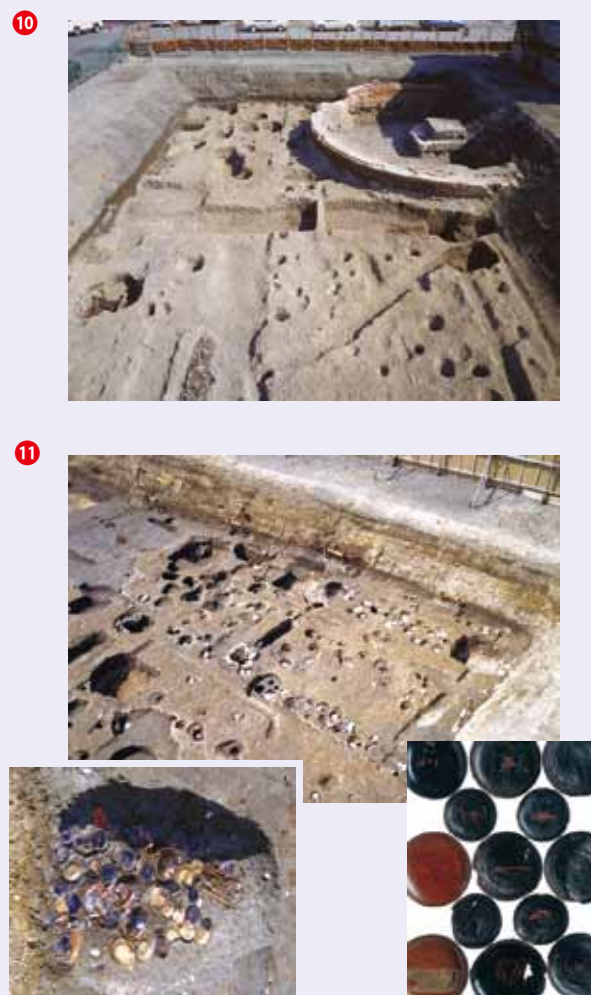
八条二坊十四・十五町跡

京都駅前の西洞院通の西側にあたります。京都駅ビル建設に伴う再開発により、比較的大規模な発掘調査が実施されています。発掘調査によると、この地は平安時代後期から鎌倉時代に栄えていたことがうかがえます。特に13世紀末～14世紀初期にかけては町屋が展開し鑄造関係の遺構が増大します。室町時代になると遺構も少なくなってきます。室町時代後半になると宅地から耕作地に変換して行ったようで、近世になると本格的に畑地となって幕末に至り、明治10年には京都駅が建設されます。



八条三坊二・三・六・十四町跡

京都駅ビル建設と周辺の再開発により、ここに大規模な発掘調査が実施されています。発掘調査による知見は、平安時代前期～中期には自然流路があり、そこから祭祀遺物等が出土しますが、条坊の施工はなされていないと思われ。平安時代後期になって、整地され条坊が施工されたようですが、一部の道路位置にずれが生じていることが指摘されています。また、室町小路は、施工前に人工の河川として利用していたこともわかってきています。鎌倉時代～室町時代に遺構や遺物が増大しており、この地も鑄造関係のものが多く出土しています。京都の鑄造生産の中心地と考えられます。その後、衰退し、耕作地に変貌して幕末にいたるようです。



14 八条三坊四・五町跡

近鉄京都駅北側のホテル建設時に、発掘調査が行われています。八条三坊四・五町にあたる場所です。この両町については、文献史料で四町は平安時代末期の関白藤原忠実が阿弥陀堂を建立し丈六の阿弥陀如来を安置したことや八条院暁子内親王額が設置されたこと等がみえます。五町は藤原頭隆の八条町尻第や二条天皇の仮御所、美福門院藤原得子の御所、権大納言平頼盛(清盛の弟)の邸宅である八条室町亭(池殿)などがみられます。発掘調査では、平安時代後期の建物や井戸、泉、池、湿地等が発見されています。各々の建物や護のものかは不明ですが、泉や池とセットになることや施工技術から、かなりの規模の邸宅だと思われる。また、遺物も豊富で「白散」銘の墨書土器等がみつかっています。



「白散」銘 墨書土器

京都駅周辺の発掘調査地分布図



資料提供:財団法人京都市埋蔵文化財研究所